

ベネズエラの奇妙な反政府暴力行動

ベネズエラが、奇妙な形で揺れています。2月12日の反政府派の街頭行動に端を発し、各地でマドゥーロ大統領の退陣を要求して、執拗な暴力的行動が行われていると報道されています。では、実際はどうか、ひとつひとつ見てみましょう。

正確には、最初の反政府抗議行動は、11日にコロンビアとの国境の県のタチラ県で学生たちが国内の治安の回復を要求して起こされました。その際、一部の学生が政府施設を破壊したりして治安を乱したことから警察により逮捕され、そのことを聞いて、午後隣のメリダ県でも学生を中心にして激しい抗議行動が起き、逮捕者も出ました。両県とも反チャベス勢力が強い地域で、知事や市長は、無法な暴力行動を適切には取り締まりませんでした。そして、2月12日、午後2時過ぎに各地で一斉に暴力的な反政府抗議行動が起きました。首都カラカスでは、検察庁などの政府施設を破壊するなど過激な行為が行われ、銃弾により3名



検察庁を襲撃する反チャベス派

の死者と60名余の死傷者がでました。死亡者のうち、2名は反チャベス派の青年で、1名は両派の衝突中に計画的に狙われうなじに銃弾を受け、1名は銃弾を受けた仲間の真相を知っており、その夜衝突場所からかなり離れたところで暴走バイク・グループに頭部を銃撃され死亡したものです。現在カラカスを走り回っている暴走バイク・グループは、反チャベス派です。死亡者のうちの1名はチャベス派の青年で、両派の衝突の混乱の中で銃弾を受けています。12日の抗議行動には、学生もいましたが、大多数は学生ではなかったと報道されています。



←整然とした行進で暴力反対を訴えるチャベス派

しかし、奇妙なことに、この暴力的行動には、最大野党の民主団結会議(MUD)の指導者、エンリケ・カプリーレス、ミランダ県知事は、広範な国民の支持を得られないとして、さすがに同意せず、MUDとしては、参加しませんでした。

その後、死亡者が3名増え、2月21日現在死亡者は6名に達しています。2名のうち1名は反政府派の学生で、もう2名はチャベス派の活動家です。死亡者は双方に同数出ており、一般の報道にいわれるような、政府による弾圧で反政府派の6名が殺害されたわけではありません。

この暴動を計画し、扇動した人物は、「人民の意志」党の指導者、レオポルド・ロペスです。人民の意志党（2009年創立）は、MUDにも参加していますが、大統領選挙でも7%程度しか獲得しない、MUDの中では、カプリーレスが指導する正義第一党(PJ、30%近く獲得)、



新時代党に次ぐ第3の勢力です。人民の意志党は、最も過激な右派で、選挙に頼らず、街頭行動で社会的騒擾を引き起こし、マドゥーロを退陣に追い込む戦略です。カプリーレスは、4度の選挙国政選挙に敗れた経験から、現在は、地方政治で実権を握り、実績を上げて広範な国民の支持を得て、次の2018年の大統領選挙で勝利したいという道を選んでいますが、1月には国内の治安対策でマドゥーロ大統領と会談し、協力を話

合っています。そうしたことから、レオポルド・ロペスは、カプリーレスをチャベス派に妥協した裏切者と呼んで、MUD内での新たな指導権の獲得をねらっていたのです。より過激な行動をとることにより、MUD内での主導権を握ろうとしているのが、ロペスの作戦でした。ロペスは、かつて米国のケニヨン・カレッジとハーバード大学のケネディ・スクールで学び、その際に、CIAと関係ができたといわれています。また、米国のラテンアメリカへの干渉機関となっている米国開発庁(USAID)から資金援助も受けています。ロペスの後ろに米国の影がちらつく所以です。



しかし、今回の暴動事件の実際の発端は、2月初め、ベネズエラでカリブ海プロ野球シリーズが開催された際、54年ぶりに参加したキューバ・チームに対し、連夜宿泊ホテル近くに反チャベス派の200名余の若者が集まり、反キューバを叫んだり、大きな音を出したりして妨害し、少なからずの者が逮捕されるという事件がありました。

反チャベス派のカプリーレス

さらに、レオポルド・ロペスは、2月1日、街頭行動を起こし、マドゥーロを退陣に追い込むとの計画を語っています。2月12日の街頭行動の呼びかけには、これらの最近の逮捕者の釈放も含まれていました。2月12日の騒擾事件は、以前から計画されていたようです。

検察庁は、ロペスを騒乱の責任者として指名手配し、ロペスは潜伏して表舞台から姿を消していましたが、これも奇妙なことに、2月18日午後、警察当局に出頭しました。この裏には、有力な右派*が、この騒動を利用してロペスを暗殺し、左右の劇的な対立を引き起こして内戦状態にし、米国の介入を招くという筋書きを作っていることが、政府の情報網に入り、それをディオスダード・カベージョ国会議長（ベネズエラ社会主義統一党第一副議長）が、マドゥーロ大統領の要請を受けて、早朝ロペスの家族に伝えたという事情がありました。その結果、ロペスは、身の安全を図るために当局に出頭し、政府の保護を受けた

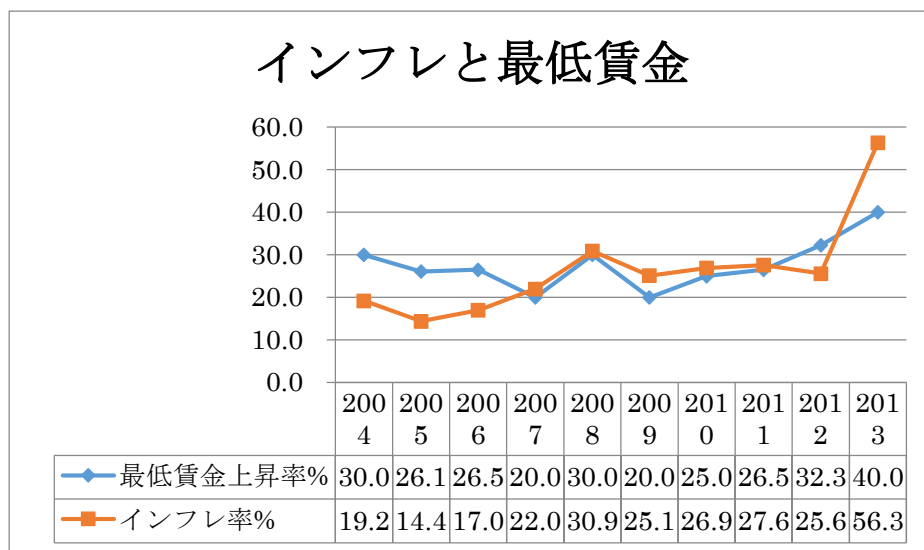
方が良いと判断したからでした。中立系の新聞「ウルティマス・ノティシアス」には、ロペスが広場で演説し、カベージョ議長に付き添われ当局に出頭し、身柄を預ける場面が動画で掲載されています。一般紙がいうような警察による「逮捕、拘禁」ではなく、「身柄の拘束」に当たります。（*マドゥーロ大統領は、名前を明示していませんが、ライバル関係にあるカプリーレスのことと思われる）。



警察に出頭して護送されるロペス

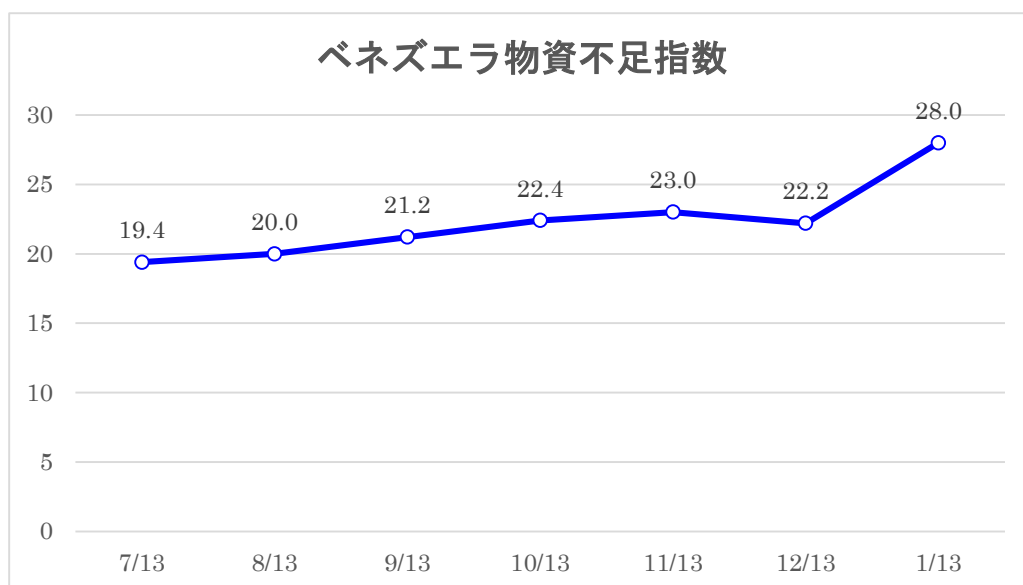
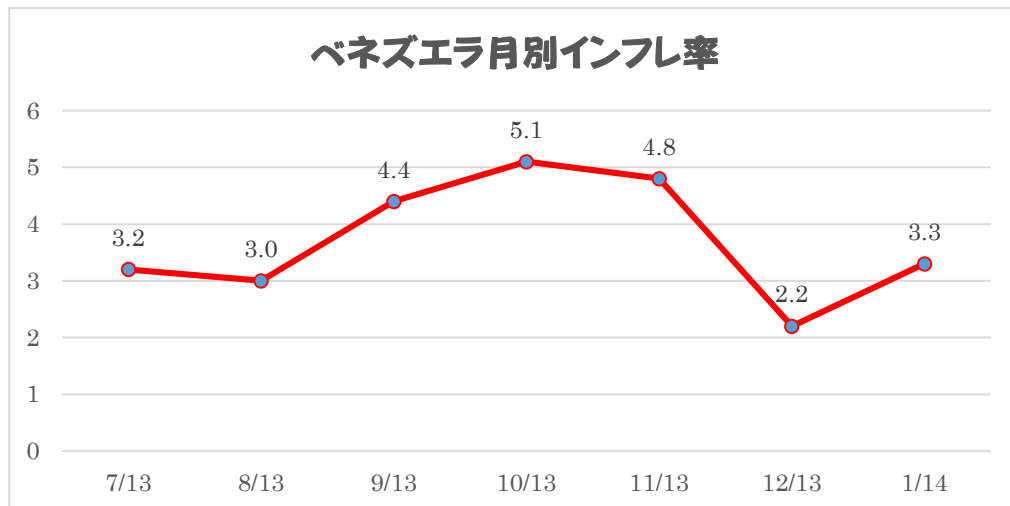
ところで、ベネズエラは、今、大きな経済困難に直面しています。下記のグラフが示すように、インフレが、昨年度は年率 56% を超え、物資不足指数も高い水準にあります。加えて長時間停電が頻発して、日常の生活への国民の不満は、少なからずのものがあります。従来、歴代政権が、輸入依存度が極めて高い歴史的構造の中で、ボリーバル高を人為的に長期に維持し、輸入品を安くし、物価の値上がりを防いできたことから、ボリーバルとドルとの実質交換レートが公定レートの数倍になるという構造ができあがっています。その構造の中で、実質ボリーバル安の内容が反映されインフレが加速されてきました。

そこで、マドゥーロ政権になり、ボリーバル通貨を切り下げた結果、今度は輸入物資の価格が上がり、インフレを招くという複雑な事態があります。また、人為的なボリーバル高は、富裕者のボリーバル切り下げの憂慮から海外へのドルの流失を招き、外貨の減少につながります。そして外貨管理が強化されると、輸入が減少し、大手輸入業者の画策もあり、輸入量が減り、物資不足を招くという悪循環の構造が生まれています。



しかし、これまた奇妙なことには、12日から続いている反政府抗議行動には、現在の経済問題に対する抗議の要求、「インフレを抑えよ」、「最低賃金を上げる」、「モノがなくて困っ

ている」、「雇用を増やせ」などという日常的な経済的要求はほとんどありませんでした。要求されたのは、「マドゥーロよ、退陣しろ」、「独裁制を終わらせよう」などがほとんどで、その他には「国の経済への介入反対」、「共産主義のキューバのいいなりになるな」、「収監されている学生を釈放しろ」というものがある程度でした。



マドゥーロ政権は、直近では昨年4月の大統領選挙で選出され、12月には地方選挙でも勝利し、多数の国民の支持を得ていることは疑いのないことです。また、与党は国会では2010年の国会議員選挙で165議席中98議席を占め、県知事では、2012年の県知事選挙で23件のうち20件を占めています。さらに市長では、2013年の選挙で335市のうち250市で市長を獲得しています。つまり、厳しい経済困難があるとはいえ、マドゥーロ社会主義統一党(PSUV)政権は、4回連続国民の審判で支持を受けています。この政権にベネズエラ共産党をはじめいくつかの政党が協力し、今回の騒擾事件でもマドゥーロ政権を支持しています。

そうしたことから、ラテンアメリカ・カリブ海地域では、中南米・カリブ海共同体(CELAC、33か国)、南米諸国連合 (UNASUR、南米 12 か国、南米南部共同市場 (MERCOSUR、5か国)、カリブ共同体 (13 か国)、米州ボリーバル的統合 (ALBA、8 か国) が、選挙で選出され、信任を受けているマドゥーロ大統領の退陣を暴力的街頭行動で要求するレオポルド・ロペスの暴力的行動を批判し、マドゥーロ政権の支持をいち早く表明しています。ただし、コロンビアは、サントス大統領は、当初マドゥーロ大統領を支持していましたが、これも奇妙なことに、その後マドゥーロ政権が、反政府派を弾圧しているとして、パナマのマルティネリ大統領、チリのピネイラ大統領とともに、批判しています。



米国の干渉を非難するマドゥーロ大統領 米国は、19 日オバマ大統領が、ベネズエラ政府によるベネズエラ駐在の 3 人の米国人外交官の追放には根拠がないし、反政府派の要求は正当であり、逮捕者は釈放すべきであると述べています。これに対し、マドゥーロ大統領は、この発言は干渉的であり、ベネズエラのことはベネズエラが決める、米国、ベネズエラ双方が外相を派遣し、対話を行おうと提案しています。

数々の奇妙な謎を解くカギは、ラテンアメリカ全域で行われている米国の巻き返し戦略にあるようです。マドゥーロ政権は、問題の背景には、ウリベ元コロンビア大統領が、レオポルド・ロペスに資金援助し、さらにウリベの後ろに米国がいると非難しています。また、今回のこの時点での暴力行動の勃発は、CELAC の首脳会議で米国からの自立が強調されたことへの仕返しとして、南米の保守 3 カ国、コロンビア、パナマ、チリ (バチエレ政権が 3 月に成立する前にねらって) を抱き込んで、南米の分裂



レオポルド・ロペス を策しているのであるという指摘もあります。18 日に、カプリーレスが、ロペスの暴力行動に加わらない理由として、ツイッターで、「たとえどんなに意見が違っていても、われわれは、常に何よりもまずわれわれのベネズエラを団結させなければならない。それは、決して暴力では達成できない」と述べています。カプリーレスの過去の行動を見ると、奇妙な発言で疑問が残りますが、もし本当にこれをカプリーレスが今後実行するなら、苦い 4 回の敗北から、彼も何かを学びつつあるといえましょう。

(2014 年 2 月 22 日 新藤通弘)